九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

滝沢克己・椎名麟三・内村鑑三におけるキリスト教受容の文学的研究――「インマヌエル」「復活」「再臨」を中心とした批評的考察

小林, 孝吉

https://hdl.handle.net/2324/1959202

出版情報：Kyushu University, 2018, 博士（学術）, 論文博士
バージョン：
権利関係：

氏　　名　：小林　孝吉

論文名　：滝沢克己・椎名麟三・内村鑑三におけるキリスト教受容の文学的研究――「インマヌエル」「復活」「再臨」を中心とした批評的考察

区　　分　：乙

論文内容の要旨

本論文は、日本の近代以降のキリスト教受容において、神学、文学、伝道などの分野で影響力のあるユニークな人物として、滝沢克己（１９０９―１９８４年）と、椎名麟三（１９１１―１９７３年）、内村鑑三（１８６１―１９３０年）の三人のキリスト者を取り上げ、その受容体験の意義と独自性を、社会・文化状況とも関連させて比較、解明する文学的研究である。

研究対象とした神学者、文学者、伝道者は、それぞれ異なった時期、方法でキリスト教と出会い、生きるために存在をかけた格闘のなかで、独特な形で「回心（コンヴァージョン）」を体験し、滝沢克己は神学・宗教学、椎名麟三は小説・戯曲などの文学作品、内村鑑三は聖書研究・伝道を通して、生涯にわたって、その信仰体験を証（あかし）している。

滝沢克己は、西洋哲学から西田哲学を研究し、西田幾多郎の「絶対矛盾的自己同一」の「原事実」を知る。その後、ナチズムの嵐の時代に、西田幾多郎の勧めでドイツの福音的神学者カール・バルトに学び、教会・聖書の外における信仰の可能性の課題とともに、「２４年間」も洗礼を受けないまま、独自の「インマヌエルの神学」を確立する。彼は『西田哲学の根本問題』（１９３６年）、『カール・バルト研究』（１９４１年）、『夏目漱石』（１９４３年）から出発し、その神学の核心を「神人の原関係」と名づけ、神と人との間には、教会の壁の内外、信仰の有無を問わず、「不可分・不可同・不可逆」な関係があることを明らかにし、哲学、神学、新約学、仏教、文学、経済学、最後は心身論、新興宗教・晴明教の教義まで研究領域を広げた神学者・宗教学者である。

椎名麟三は、戦前に共産主義による非合法運動における投獄経験をもち、獄中で死と向き合い、転向して出獄後に、ドストエフスキー『悪霊』から「自由」を知り、文学を志すことになる。敗戦後の時代と精神の廃墟のなかで、実存的小説『深夜の酒宴』（１９４７年）で新たな戦後文学として評価を受けてから、死と自由を描いた『永遠なる序章』（１９４８年）、自己分裂の記念碑となる『赤い孤独者』（１９５１年）などの作品とともに、精神的絶望が深まるのなかで、１９５０年１２月、日本基督教団上原教会の赤岩栄牧師からキリスト教の洗礼を受ける。

この約一年後、「復活のイエス」との出会いという劇的な「回心の瞬間」を経て、『邂逅』（１９５２年）、『美しい女』（１９５５年）などの代表的作品を発表する。その文学と信仰の光源が「復活」

※ 2,000 字程度にまとめること　　（比乙様式３）

の事実であり、彼はそれを人間的自由と区別して「ほんとうの自由」と呼び、日本における新たなキリスト教文学を創造するのである。

内村鑑三は、明治維新の７年前に高崎藩の武士の子として生まれ、儒教的環境で育つ。１６歳のとき、アメリカからW.S.クラークを招いて建学された開拓使附属札幌農学校に、太田（新渡戸）稲造らとともに二期生として入学する。そこでキリスト教と出会い、「イエスを信ずる者の契約」（Covenant of Believers in Jesus）に署名し、１８７８年に１７歳で、メソジスト監督教会宣教師M.C.ハリスから洗礼を受ける。卒業後の一時期、開拓使御用係の官吏として漁業調査に関わるが、最初の結婚の失敗も影響して、内部の「真空」に促されるように、苦悩の渦のなかでキリスト教大国アメリカへと渡るのである。そこでアマスト大学のシーリー総長と運命的に出会い、その言葉によって贖罪の「霊的回心」を経験する。帰国後は、ミッションスクールでの宣教師らとの軋轢、第一高等中学校教育勅語奉読式での「不敬事件」などがあり、教会、教派によらない無教会信仰者となるのである。また、日露戦争以後、「非戦論」の立場を貫くとともに、日本における誌上の信仰共同体として『聖書之研究』を創刊し、主筆として３０年間、二つの「Ｊ」（Jesus と Japan）のもと、聖書の「福音」の伝道者として生き、第一次世界大戦後はイエス・キリストの「再臨」と「再臨信仰」へ行き着くのである。

このように、滝沢克己の神学の核心は、「神人の原関係」＝「インマヌエルの神学」に、椎名麟三の文学の可能性は、「復活のイエス」に根拠をもつ「復活のリアリズム」にあり、内村鑑三の信仰は、日本独自の無教会主義から「再臨」と「再臨信仰」へと至るのである。ここには、滝沢克己・椎名麟三・内村鑑三のキリスト教受容と、そこに共通した「福音」の普遍的な水脈が流れている。

本論文の意義と独自性は、それぞれが異なった時代と社会、境遇と精神の遍歴を背景に、固有なキリスト教の受容体験を経て、どのように神学、文学、無教会信仰を形成していったかを、第一部「滝沢克己」、第二部「椎名麟三」、第三部「内村鑑三」の相互に独立性をもった三部構成によって、その評伝的人物像の考察も交えて複層的、学術的に浮き彫りにする文学的研究にある。それはキリスト教受容における、「インマヌエル」「復活」「再臨」を中心とした批評的考察である。その過程で、本論文は日本と世界をとりまく２１世紀の時代の大きな困難のなかにある、人間と社会の未来への「希望」を究明することも意図している。本論文の研究テーマは、第一部、第二部とたどりながら、第三部である内村鑑三の「再臨」と「再臨信仰」に集約されていくのである。